

序文にかえて本書の企画意図

3年目とは、学んできた知識を実際に目にして経験してきているタイミングではないでしょうか。この時期に改めて知識を整理しておく、様々なことが繋がり応用しやすくなります。今後ますます artificial intelligence (AI), large language model (LLM) などは進歩し、画像や病歴のパターン認識は自動診断に置き換わり、人間が行う必要性は小さくなります。では人間は何をすればいいのか？ 正解はわかりませんが、病名を示す知識のみでは、不十分となることは確かでしょう。

画像診断は単に診断名を導く手段ではなく、適応から撮像法、解釈、診断、治療への応用と診療戦略の選択肢を決定していく道具です。そのため、患者さんやその家族、診療放射線技師や看護師などメディカルスタッフ、主治医、そして病院経営陣や医療政策者を、画像という情報を元に繋げるハブとなることが放射線科医に求められます。どのような形であれコミュニケーション力は必須で、知識はその共通言語です。

本書では泌尿器科疾患における画像の使い方、放射線科医のあり方、実践に必要な知識を、主治医や患者さん、メディカルスタッフからの100件の質問に対する回答という形で、わが国の最先端の専門の先生が、簡潔かつ深く答えてくださっています。日々生じる疑問の答えを探していただいても良いですし、初めから通読すると、予想以上の深い知識が整理できると思います。このような素晴らしい原稿を執筆くださった著者の皆さまに、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

本書が、レポートという文書の作成から一歩踏み出す、「画像診断」を目指すきっかけとしていただければ望外の喜びです。

2025年12月
高槻病院イメージングリサーチセンター
高橋 哲